

島根県教育委員会  
教育長 新田 英夫様

## コロナ禍でも、子どもたちや教職員がゆとりをもって学び 健やかに学校生活を送ることができるよう対策して下さい

2020年7月20日  
ゆきとどいた教育をすすめる島根の会  
代表 小松 雪乃

コロナ禍による一斉休校を経て学校が再開されました。当会の構成団体の一つである島根県教職員組合が休校期間中に行った調査（5月1日付）では、「多数の生徒がせまい校舎に密集して過ごしているので感染するリスクがとて高い環境」をはじめとして、当初から「密」を防ぐための課題が多数報告されました。また、「あらゆる場面で子どもも教職員も感染しないための配慮が必要」、「休校中と再開後の学力保障をどうするか」など、課題は多方面にわたっていることがうかがえるものでした。

さらに、新日本婦人の会では全国で「学校再開どうですか？」の緊急アンケート（実施期間6/2～15）にとりくみ、保護者1200人あまりから声が寄せられました。学校再開は、「友だちや先生とあえて嬉しい」「楽しい」（51.6%）という声が多く寄せられた一方、「不安」が22.5%を占め、行き渋りが始まったという声も複数ありました。具体的には、授業時間の増、夏休みの短縮、土曜登校などの学習の詰め込み、炎天下でのマスク着用による熱中症の心配、教室の「密」、教職員の過重負担、楽しみにしていた遠足や運動会、修学旅行や合唱コンクール等の行事の中止、給食は無言で食べるといった状況がひろがっているようです。

子どもたちが日々過ごす学校生活が、「遅れた学習を取り戻す」ことや、子どもの権利や心身の健康がないがしろになるような「感染予防策」ばかりとなったら、せつかくの学校再開の喜びが、息苦しいものになってしまう。

臨時休業期間中など、大規模校を中心に分散登校で教室に入る子どもの数を減らす対応がとられました。学校現場からは、「子どもの様子がよくわかる」「丁寧に関わることができる」など、少人数学級の良さを再認識する声が聞かれました。一方、学校が再開され通常の人数に戻された学校からは「少人数で授業した時に感じた気持ちのゆとりがなくなった」「子ども一人ひとりにていねいに関わることや、子どもたちに寄り添うことが難しくなった」など、悲痛な声が聞かれています。「コロナ禍」を通じて、改めて少人数学級のよさが明らか

になっています。

7月2日には、全国知事会会長・全国市長会会長・全国町村会会長が連名で、「新しい時代の学びの環境整備に向けた緊急提言」を発表しました。「現在の40人学級では、感染症予防のために児童・生徒の十分な距離を確保することが困難であることから、その対応が学校現場において大きな課題となっている。」としたうえで、「今後予想される感染症の再拡大時にあっても必要な教育活動を継続して、子どもたちの学びを保障するためには、少人数により児童・生徒間の十分な距離を保つことができるよう教員の確保がぜひとも必要である。」とし、「少人数編制を可能とする教員の確保」を強く要望しています。

秋から冬にかけては第2波も予想され、正しく感染予防しながら可能な限り休校措置をとらず、子どもの学習権を保障していく事が求められています。そのためには今のうちからコロナ禍でもゆとりをもって学び、健やかに学校生活を送ることができるような対策が必要と考え、以下要請します。

## 記

1. 感染症対策や一人ひとりの子どもたちにゆきとどいた教育、心身のケアができるよう、国に対して少人数学級の実現を強く要望して下さい。島根県に対しては、来年度から予定されている少人数学級編制基準の後退を、来年度は凍結するよう要望して下さい。

2. 感染や熱中症、子どもの心身のケア等、教職員は休憩時間もなく働いています。消毒作業やトイレ掃除は現場任せにせず、支援のスタッフや専門の業者を各学校に配置して下さい。

3. 文科省は「遅れた学びを取り戻すのに数年かけて」と指示しており、教育委員会によって学習内容の進度にも違いがあると思われます。今年度の県の学力テストは中止し、教職員の増員などコロナ禍の学校生活に必要な施策を行って下さい。